

# ふるさと奥尻通信

平成27年2月28日  
奥尻町教育委員会発行  
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

## 巻頭言

奥尻の先人達の苦勞に思いを馳せる時、目に浮かぶのは風雪に耐えながら荒波に対峙する人々の姿か。謙虚な姿勢で歴史に学び、今日を生きる糧としたい。

## 特集 太田広城 ー二つの海峡を越えた男ー 第2回

前号に引き続き、太田広城について、今号では奥尻に渡ってからの事項を紹介します。明治13年(1880)、太田は津軽海峡を渡り、福山(松前)に赴きます。その後、請われて対岸の奥尻島へ赴任します。明治17年(1884)年の事でした。

太田は同18年より第3代戸長に就任し、これまで奥尻には無かった先進的な政策として、共同儲蓄米制度(18年)、農業奨励、禁酒制度(18年頃)を導入、普及に尽力し、インフラ整備として官民協力の下、東から西へ島を縦断する山道を開削(20年完成)するなど抜本的とも言える改革を行いました。というのも、当時は奥尻近海では極端な不漁が続き、島民が貧困にあえぐ状況でした。そのため、島内外の協力の下で常時から米を倉に貯蔵することで飢饉に備えることとし、島内でも水田試作が行われるようになります。また、不漁時に酒を常用して怠惰な生活になりがちだった島民を諭してまわっていた沢口富士吉の禁酒策を採用して全島に適用し、島民の生活改善に努めました(太田の戸長辞任後は沢口の離島もあり自然消滅)。

また、明治23年までの太田の在任期間中には、これまで1校しかなかった島の学校を、北部地区に茶津分校(後の宮津小)、南部地区に青苗分校(後の青苗小)として分割し、通学の便が図られた他、奥尻郵便局開局(19年)、稲穂灯台起工(22年)など近代的な社会基盤が整備されていきました。明治10年~20年代にかけては、まだまだ奥尻の経済、社会基盤が脆弱な時期であり、ともすれば世間と隔絶してしまう事も多かったろうと想像されます。そんな奥尻発展を導いたのが太田であったのです。現在につながる奥尻発展の礎を築いたと言っても過言ではありません。

戸長時代の太田に関する回顧録を紹介します。「戸長の太田さんの頭は綺麗に禿上がっているのでランプと言われていたが、堂々たる風采の人で、文学や和歌の蘊蓄もあったらしく、殊に字は御家硫の見事な筆跡であった。島の人々は殆ど全部が漁師で、趣味のない生活を毎日繰り返して居るのであったが、太田さんは秋から冬にかけての漁の暇な時期になると、俳句と川柳の中間に行く様な雑俳というものを行って流行させる事に大いに努力した。題は太田さん自身が選び、短題と長題とあり、短題は「寒き朝」とか、「思い出を」とか「花散りて」とかいう様に普通の発句と同じ五字かぶりであり、長題は和歌の下句と上の句を各その俣に用いた。例えば短題ならば「花散りて 蝶は葉末の 露にむせ」、長題ならば「浪の音 枕に永く眠りけり 塩釜沢の寺のほとりに」という様に作るのである。発表は、余り納まった調子のものを避け、なるべく軽い俗っぽいものを選ぶ。川柳は柳多留の様に引っかけも差し支えない。選も勿論太田さんがやって、俳名も如蘭と号されていた。冬季中、2、3回は会を開き、句集を作り、入選、特選者には賞品を与え、又慶事追善等にも句会を催し、扁額を作らせて、地蔵堂や村社の欄間に掲げたりしたので、塩釜部落だけでなく全島に普及し、島人の情緒を涵養するに非常な効果があった様だ。こんな具合にして無智な島民を導いて行く所に、太田さんのえらさがあったと思う。父も雑俳をやったし、自分も子供の癖に大人に混じってやって居た。」(早瀬忠太郎「回顧録」昭和17年)



八戸老年会幹部 前列左3人目が太田 明治末頃



北海道時代の太田 『階上町史』所収



晩年の太田(写真拡大) 階上町教育委員会提供



太田広城の墓(八戸市大慈寺)三浦榮一氏提供



開削された中央道 20万分1地形図久遠

奥尻写真語 第2回 ホッケの大漁



左の写真は昭和23年(1948)5月に、ホッケの大漁(地元では”だいらょう”と訛る)に沸く青苗港の様子です。岸壁いっぱいホッケが山積みされています。時は終戦後の食糧難の時代、都市部の人々は盛んに地方へ出かけ、物々交換で食糧を手に入れていた頃です。この頃は奥尻以外の各地で漁獲高が高く、魚類は都市部へ流通し、戦後の食糧難に助かったといわれます。一昔前、本州の都市部などでは、ホッケは安くて美味くない魚の代名詞となっていて不思議に思いましたが、冷蔵・冷凍技術のない時代に北海道から内地へ大量に供給された魚類が、そのイメージを作ったのかもしれない。また、ホッケは鮮度が下がりやすく、風味も悪くなりがちなのも一因でしょう。ホッケ漁は漕曳き網や刺し網(右の写真、昭和30年頃)で獲りましたが、ここ15年で約80%も減少しているとのことで、もはや庶民の食卓に上がらない、高級魚となりつつあります。

学芸員の本棚 2冊目



学芸員オスマエの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

「驚きの介護民俗学」 六車由美

著者である大学准教授だった気鋭の民俗学者が、なぜか転職して老人介護施設で働くようになった、という時点で、エッ?なんで??である。介護の場で老人達の口から聞かされる様々な人生ドラマに、日本という国と、そこで生きてきた日本人という人間たちの姿に、“ドロリ”とした近現代史を見るようで、時にハッとさせられる。「忘れられた日本人」が再度歴史の表舞台に現れる様だ。

月刊 奥尻のつり 2月号

先月に引き続き奥尻港ではホッケ釣りの釣り客の姿がみられます。ただ、大きな群れではないようで、大釣りしたような話は聞かれません。それでも、船釣り客の情報によれば、沖合にはロウソクホッケの群れが回遊しているとのこと。ようやく春のホッケ復調か? 4、5月にまた姿を現せてもらいたいものです。檜山管内でのホッケ漁獲高は2010年以降減る一方で、1993年以降で見ると、2013年は過去20年で過去最低となってしまうています。なしてこうなったんだ?と島人はみな首をひねっているのですが、真イカやスケソウダラなどを含め、全体の漁獲高が下がり続けているのが現状です。かつてのニシン漁なら、漁師の側が魚を追ってどんどん北上していくのですが、現在のそのような漁家経営ではそうはいかないのが難しい所。

続・昭和奥尻生活詩 2回

昭和10年 奥尻郡釣石尋常高等小学校一年生「鳥賊つけ」

今警俺鳥随新淋遊雨	雨
日報達賊分聞しぶ降	続
ものもが人をい事	く
上赤死釣が見俺が	
がいぬれ死る達なく	
つ旗ばねんとだい	
て かばで内	仕事
九い り み地	に出
月る だ るは	れな
廿	い
日	
作	

何とにじいろたししす順し  
になつたまそ。てた。調た奥  
ししるくすろま酒天一に、尻  
ままのり。発た造然月行初産  
ししをと先表、会水下わの酒  
よよ焦醸ずさ商社が旬れ地造  
ううらさはれ品へ、にて酒好  
か。ずれ桶るう運仕奥いの適  
ね酒にての頃べば込尻る仕米  
の待日中かルれみでよ込  
肴つ本でともま水採うみ  
はこ酒 思そしと取でが

新酒発売へ着々と



巨大滑り台で遊ぶ子どもたち

足のり走滑い小設がな民ベのキ  
で販、競りる規け自い向ン雪一二月  
し売ジ技台も模よ由冬けト山場二  
たもん、やでなうに期ののが感で二  
。あギ宝趣すがと雪間野行謝地十二  
つス探向。ら二とに外わD元二日、  
てカしを当も〇ふ、イれA若者、桜  
、んなこ日取一れ大ベまY者、ケ  
皆とどらはり二合人ンしと有主  
さ特がし特組年子トたい志丘  
ん製あた製んか場どが。う  
満鍋 滑のでらをも少町イ

雪山感謝DAY開催

かんはま育のデかいには中る  
れルあしちかカいま雪旬月真  
気ンりたにもイのしも前だ冬  
味しが。のののかたほかとの  
してたま私れで?とら思つ二  
んくいあはま地いやん雨つ月  
るし、ちせ城やはど模ては一  
な。あ気がいねが北道え。番  
と分近と。大海南て下のし  
へもい驚道き道はし旬に、は  
浮ルのき央いが暖まに、れ

新米之記録(編集後記)

ての重り物での大が番案きチ  
、特複は選す招会引がをまシ  
参色し函手の聘でき近見した  
加のて館がでもは締づまた。ザ  
者違イマ来、検、まいす。新  
獲いるラる果討ゲると、し  
得を点ソのたしスよき、し  
で売でンかしてトうたいが  
すりすと?ていらでなよデ  
ねに。日氣誰るンす。よイ  
し大程がかそナ。よイ  
会がか大う!今身本

マラソンカウントダウン4

平成13年 6月22日発売

今月の奥尻のお宝  
ふるさと切手オクシリエビネと風景印